

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき数に入る 名をぞとどむる  
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第30号

平成28年8月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

## 平和な世界を目指す弥勒信仰の山、笠置山

### 笠置寺の小林慶範前住職、宇治市で講演

#### 7月16日、宇治市民大学開かれる

7月16日(土)、宇治市民大学の宇治学コース、笠置寺の前住職、小林慶範氏による、宇治・山城の今昔「元弘の変～後醍醐天皇の笠置山挙兵～」の講演が宇治市生涯学習センターで行われた。

小林前住職は、1936年生まれ、1959年から44年間笠置寺の住職を務め、2003年に住職を副住職に譲る。笠置山の自然と文化財を守る会を主宰する。

この日配布された資料の見出しは以下の通り。

#### ◆タイトル「後醍醐天皇元弘の変と笠置寺」

- ・後醍醐天皇倒幕に至る時代背景
- ・後醍醐天皇、皇居を脱出される  
脱出計画の変更
- ・天皇、笠置へ  
なぜ、笠置寺なのか  
太平記による理由と、真実は何か
- ・笠置の戦いと笠置落城  
笠置の戦いについて  
笠置の戦いの敗因は  
落城と神器について
- ・落城後の笠置寺
- ・楠木正成公とは何者ぞ
- ・南朝正統論と明治以降の国家体制と笠置寺

#### 後醍醐帝は、何故、笠置山に入ったのか

講演の中で、扇谷昭が印象に残った件を紹介する。

まずは、「なぜ、後醍醐帝は笠置へ入ったのか」であるが、笠置寺の住職を務めた方ならではの視点から、目からうろこの説を承った。

元弘元年8月24日、後醍醐帝は二度目のクーデターの発覚を受け、京都の御所を脱出する。

京都を脱出して、25日、奈良、東大寺に入るが、この経路は全く不明とのこと。そして、東大寺には北条方に

組みする僧がいることを知りながらも、何故、この地に出向いたのかが分からない、とも。

そして、明けて26日、和束に入るが、是もまた、こんな山道を使って、なぜ、こんな山深いところに行ったのかが分からない、とも。

そして、27日、後醍醐帝は笠置山に入るのだが、その理由は、大きく3つと話す。

一つは、笠置山は、誰しものが思うことであるが、守りやすく、攻めにくい地であること。三方が木津川とその支流で囲まれ急崖をなし、南方のみが尾根伝いに柳生に繋がっている。

しかし、こんな理由のみで、笠置に入るはずはない。

二つは、戦いになることは最初から分かっていたことであり、東大寺に入ると、奈良のまちは再び焼土と化す恐れがあったこと。治承4年1180、平家による南都焼き打ちで焼土と化した奈良のまちは、東大寺の復興に23年も費やした。この二の舞は避けなければならなかった。

そして、三つ、是が最大の理由である。

笠置寺は弥勒信仰の山であったこと。弥勒信仰が理想とする世界は、山も谷もなく、一つの気候で、そこに住む人々は一つの言語を使う。すなわち、弥勒信仰は争いのない平和な世を創ることを謳うものであり、笠置山はその原点の場所であった。

笠置寺、そして東大寺東南院の責任者であった、僧、聖尋(しょうじん)が、「帝、笠置山へ」といった時、後醍醐帝は逃避行に疲れながら、「よし!」と、天皇親政への新たな思いを持ったのではないかと結論付ける。

笠置山には、弥勒信仰を象徴する巨大な弥勒菩薩石造(磨崖仏)があり、目線を右下に落とし、左手を伸ばし、手のひらを開けて、お詣りする人、一人一人を優しく迎えてくれる。

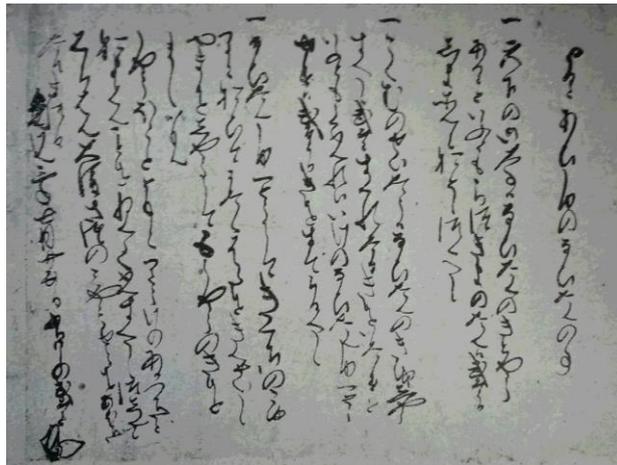
しかし、明治維新を迎え、明治時代が進むと同時に、笠置山の弥勒信仰は遠ざけられたとも。

明治政府の喫緊の課題は富国強兵であった。国を富ま

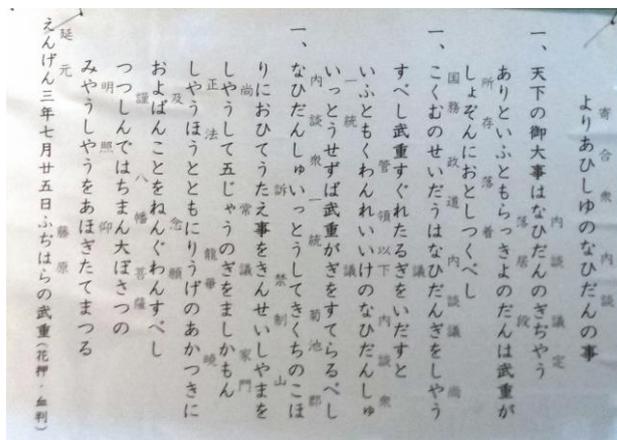
## 菊池家憲

菊池家憲は、菊池武重の血判起請文で、現在、日本に残る血判としては最古のもの、家の掟としての置文である。

内容は、江戸時代の末期、肥後では広く知られており、横井小楠から由利公正と紹介され、この第2条が五箇条のご誓文の第1条に影響を与えたといひ、更に井上毅をして、帝国憲法の制定において参考に供せられたといわれる。



↑ 菊池武重の血判起請文・菊池神社蔵



↑ 菊池家憲・読下し文 平泉澄博士著「物語日本史」より

## 議会制民主主義の原典ともいえる内容

記されている内容は、第1条、菊池氏の政治的去就、乃ち「天下の御大事」については、惣領の武重が決定権を持つこと、第2条、菊池の統治権の及ぶ領域内の支配、乃ち「國務の政道」は、菊池の有力庶家で構成する管領以下の内談衆の合議を優先すること、第3条、畑や山についての禁制と奨励を規定。

世俗倫理の確立、正法の護持、正法を体現する宗教者への挙族的敬仰、それらの統一の上に、弓箭をもって「朝家」に仕える菊池氏の使命を達成することを詠い、特に第2条は、現在の議会制民主主義に通じる内容である。

(文責「四條齋補正行の会」代表 扇谷昭)

すためには、強兵を持って、他国との争いは避けて通ることができなかったもので、笠置山の弥勒信仰が目指す、言葉は一つ、平和な世界は受け入れられなかったのである。だから、明治に入ると、笠置山は、弥勒信仰の場所としてではなく、太平記に載る後醍醐帝と楠木正成、運命的な出会いの場として、各学年の教科書に載ることになったのである、と。

## 笠置寺に残る元弘戦陣取り図

笠置山の戦いにおいては、誰もが疑問に思う官方の兵力について、明快な答えが飛び出した。

太平記等では、笠置山における兵力は、官方2500、幕府方7650とされている、と。しかし、小林前住職の答えは簡単明瞭で、笠置山にこの人数は入らない、と。

おそらく数百といったところか。では、官方の主な武将は誰だったのか。笠置寺には、湊川神社に奉納されていた元弘戦陣取り図を写したものが残っていると。

この陣取り図には、一の木戸総大将として、足助次郎重範(現在の豊田市足助町出身)と書かれており、注目は行在所を守った武将として、石川(河内)、錦織(近江)の一族13名と記されている、と。

おそらく、駆けつけたのは地元の豪族が大半で、笠置山は武将、貴族、僧の混成部隊であったのではないかと、寄せ集めの軍で、統率のとれた軍隊とは言えなかったのではないかと結論付ける。

一方、幕府方の7650であるが、この軍は“笠置山を取り巻いて”とあり、本陣の置かれた宇治から南に取り巻いて、笠置山を中心に広くあちこちで戦いが行われた、と。

後醍醐帝が笠置に入って一カ月、9月28日夜半に台風襲われるが、「まさかこんな時に…」、「こんな場所から…」と、それまで一度も戦いの場とならなかった急崖な法面(東側)をよじ登ってきた50人の奇襲部隊に襲われ、虚を突かれた官軍は崩壊する。今も、この場所を降りた者も居なければ、登った者もいないと、小林前住職は紹介する。そして、この奇襲作戦は、後に太平洋戦争の真珠湾攻撃のモデルとされた、とも。

## 正成は笠置で生まれた？！

そして、極めつけは、先代から受け継いだ”正成は笠置で生まれた“説である。正成が記録に登場するのは、この笠置だから。笠置ゆかりの人でなければ出てこない発想に驚きながらも、夢のある話と受け止めた。

そして、その正成だが、笠置では「正成公」といい、千早では「楠公さん」と呼ばれると紹介し、この違いに疑問を持ちながらも、千早を訪れた際、千早の人々にとって、正成は土地にいた人であり、自分たちの生活の面倒を見てくれる豪族として、親しみがあつたのだろうと締めくくられた。人物への思いを強く持てば持つほど、その呼び方にもこだわる地域性を強く感じた。